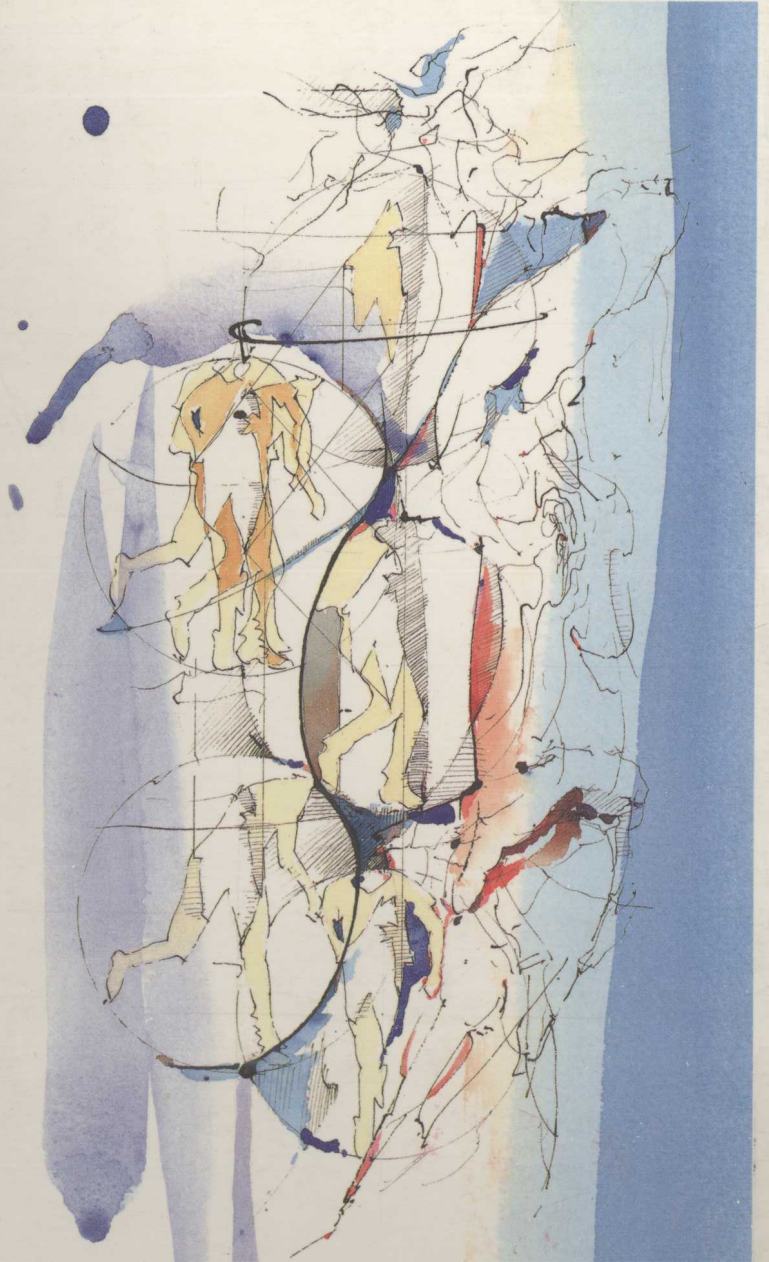


前田愛
著作集
第五卷

都市空間のなかの文学



都市空間のなかの文学

前田愛著作集 第五卷

筑摩書房

前田愛著作集第五卷

都市空間のなかの文学

一九八九年七月三十日 初版第一刷発行

著者 前田 愛

発行者 関根栄郷

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一六一四

電話 五六八七―二六八〇（営業） 五六八七―二六七〇（編集）

振替 東京 六一四―一二三

印刷 精興社／製本 鈴木製本所

〔編集委員〕

多木浩一

十川信介

吉田照生

〔編集協力〕

小森陽一

関 礼子

藤井淑禎

山本芳明

© 1989 M. MAEDA ISBN 4-480-36005-0 C0395 Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は小社読者係に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

凡例

都市空間のなかの文学

I

溼東の隠れ家 「春色梅児誉美」 7

開化のパノラマ 「東京新繁昌記」 34

清親の光と闇 53

廃園の精霊 「狐」 59

塔の思想 「佳人之奇遇」 73

『一国の首都』覚え書 93

獄舎のユートピア 「最暗黒の東京」 100

II

BERLIN 1888 「舞姫」 145

二階の下宿 「浮雲」 177

仮象の街 「彼岸過迄」 201

III

SHANGHAI 1925 「上海」 251

✓芥川と浅草 都市空間論の視点から 284

劇場としての浅草 「浅草紅団」 288

焦土の聖性 301

紙のうえの都市 「エーゲ海に捧ぐ」 309

空間の文学へ 「杏子」 324

*

東京一九四五年 379

街の読み方 文学に表われた都市風景 392

都市を解説する 401

幻景の街 文学の都市を歩く

大佛次郎『幻燈』 横浜 423

森鷗外『雁』 不忍池 432

泉鏡花『照葉狂言』 金沢 441

田山花袋『東京の三十年』 牛込 450

夏目漱石『三四郎』 本郷 458

永井荷風 『すみだ川』 隅田川 467

堀辰雄 『美しい村』 軽井沢 476

大岡昇平 『武蔵野夫人』 恋ヶ窪 490

三浦哲郎 『忍ぶ川』 深川・駒込 504

田中康夫 『なんとなく、クリスタル』 原宿・青山 512

解説 前田愛の記号論 山口昌男 523

解説 前田愛における時間と空間という問題 藤井淑禎 534

解題 549

装画 宇佐美圭司

凡例

- 一、本著作集には、前田愛のすべての単行本に加えて、単行本未収録論文を精選して収め、全六巻に構成した。各巻の構成については、それぞれの解題で述べる。
- 一、収録文は、単行本所収のものは単行本を、未収のものは新聞・雑誌等の初出を底本とした。著者の訂正が残されているものについては、その意向を可能なかぎり尊重した。
- 一、単行本収録で初出との異同がはなはだしいものについては、必要に応じて巻末に編集部注を付した。
- 一、本文校訂上の原則は次のとおりである。
 - (一) 字体は新字体に統一したが、人名・地名・書名等は、正字・俗字を底本のまま残した。
 - (二) 明らかな誤記・誤植は、訂正した。
 - (三) 本文中の引用文は、可能な限り原典と照合し、明らかな誤記を訂正した。ただし、同一引用文（漢詩文）の訓読や送り仮名が論文によってまちまちである場合は、底本のままとし、統一しなかった。
 - (四) 引用文のルビは、底本のままとした。
 - (五) 漢詩文の引用において、著者の書き下し文のルビは、旧仮名遣いに統一した。
 - (六) 出典の年月日表示の形式は、「文政9・10・18」のように統一した。ただし、明治・大正・昭和の年号は、明・大・昭と略記した。
 - (七) 単行本・新聞・雑誌名の表示の形式は、『』、『』、「」に統一した。（例、『柳橋新誌』『朝野新聞』『文学』）

前田愛著作集 第五卷

都市空間のなかの文学

われわれがわれわれを発見するのは、どこかわからない隠れ場所の中などではない。それはものの中のものとして、路の上で、街の中で、群衆のさなかにおいてである。

サルトル「フッサールの現象学の根本理念」金井裕訳。

江戸の大絵図には、近代的な測量術を導入した東京の地図ではかえりみられなくなった独得な作図法がこらさ
 いる。図幅の中心には葵の御紋を配した御城の空白があり、その周辺に精密に再現された町並や大名屋敷のモザイク
 がある。が、御城から遠ざかるにしたがってしだいに道路の距離は短縮され、千住・品川・新宿など、宿場の背後に
 ひろがる周辺の農村地帯になると大ざっぱな概念図になってしまふのだ。二百年のあいだ、基本的にはほとんどかわ
 らなかったこうした江戸図の作図法には、江戸時代の人びとの心のなかにあった都市空間のイメージが反映されてい
 る。江戸城を核とする同心円の構造である。

条里式の京都やヨーロッパの放射式都市とは異なる原理で構成されている江戸の都市空間のありようをいっそう鮮
 やかに印象づけるのは、黄色の線を交錯させている道路網の地に、くっきりと刻みこまれた藍色の水路のかたちだろう。
 和田倉門を起点にはじまる藍色の線は、俗に三十六といわれる見付の城郭で分節されつつ、右まわりの渦巻きを大き
 く描きだし、江戸川の水流をあわせた神田川となって東へとうねりこみ、柳橋のところで大川に結びつけられる。大

名屋敷と旗本・御家人の屋敷が複雑に入りこんだ武家地、そしてまた寺社地・町人地などの町割が、この渦巻状の堀割を基線に分画されたことはいうまでもない。江戸城を二重三重にとりかこむこの渦線は、非常の際の防衛線であるばかりでなく、ケンペルが看破したように江戸という都市の（制度を象徴していたといってもいいのだ）。

しかし、渦巻きの意匠で統一されている江戸図の図柄をさらに眺めつづけると、ケシュタルト心理学でいう反転図形のように、その背後からもうひとつの図柄が浮きあがってくる。それは、隅田川を中軸とする図柄であって、渦巻状の堀割はもちろん、本所・深川の格子状の水路までが、すべてその川筋にあつまるように見える。江戸の市街を東西に分ける折り目であり、裂け目である。

隅田川は、業平伝説や梅若伝説を引きあいに出すまでもなく、江戸という都市をとおい過去の時代に結びつける記憶の絆であり、そこから江戸の街々が絶えず新しい（神話）を汲みあげる源泉であった。また、江戸という人工都市の底辺をかたちづくる（自然）のもっとも強力な象徴であった。

堀割の渦巻きに象徴される（制度）と隅田川の流れに象徴される（自然）——江戸の市民が巧妙に使いわけていたこの都市の二重構造は、たとえば幕末の日本を訪れた異国人の眼にもおぼろげながらとらえられた。

江戸の市民は、自分たちの立派な市街と同じように、イナカ（田舎）と呼んでいる郊外をも誇りとしている。というの、どちらも、かれらの最も大きな趣味——自然に対する愛情——を満足させるからである。彼らにとつて、大都会の橋のたもとでの騒々しい娯楽が必要なのと同じ程度に、隅田川畔の木蔭が必要なのである。実をいえば、彼らは、嫌いなものが、三つだけある。第一は、漁師や船員によって代表されている怖ろしい海難であり、第二は、僧侶の住んでいる厳格な孤立した場所であり、第三は、宮殿や大名小路を取り巻いている怖ろしい防壁である。できるだけ彼らは、これらのものから遠ざかろうと努め、自分たちの気晴らしを政府の監視から最も離れた場所に求めている。（エメ・アンペール『幕末日本』茂森唯士訳）

一八六三年(文久三年)に日本に派遣されたこのスイス外交官の觀察は、海難への恐怖というようないきさか突飛な説明がまじっているものの、全体としては抑圧と解放の二重構造をかなり正確にいいあてている(「怖ろしい防壁」は、江戸城の城郭とそれをとりかこむ内堀と外堀を指している)。もともと、江戸の市民を拘束していた「政府の監視」は、幕末の緊迫した状況のもとで江戸市内に入らなければならなかった外人たちの体験からのアナロジイを読みとるべきかもしれない。江戸城の外郭に足を踏み入れたとき、かれらは外夷をかたく拒絶していたかつての鎖国世界の固い実質に触れたのである。たとえば、同じころ江戸に滞在したイギリスの國芸学者ロバート・フォーチュンは、大名小路の格子窓から敵意のこもったまなざしを浴びせられた不快感を苦々しげに語っているし(『江戸と北京』)、大君の役人や武装した家臣がいなければ、江戸は極東でもっとも快適な住宅地のひとつになるだろうと記している(『大君の都』)のは、パークスの前任者オールコックである。

江戸城の周辺から(制度の)圧迫を感じとったかれらが、その一方で、江戸郊外のたまたまにたいして最上級の讚辭を惜しまなかつたのはどういうわけだろうか。本所・深川辺りの閑寂な景觀に心ひかれたアンペールの記述を永井荷風はつぎのように要約する。「江戸の政治区域からは河流(注 隅田川を指す)によつて遠く隔離せられた此郊外の巷には商家の人の静な隱宅、見事な寺院と其庭園、おたやかな燈火の下に一家族挙つて仏具陶器のたぐひを細工してゐる職人の家の多いことを記して、著者はこの郊外の生活のいかにも閑静安寧であつたことを説いてゐる」(『為永春水』)。また、フォーチュンは、王子・飛鳥山界隈や向島一带を、ロンドンの西郊、テムズ川のはとりにあるリッチモンドになぞらえて、休み茶屋の心まいたもてなしをいりとりどりの花卉の美觀を口をきわめて称揚している。亭々とした樹々で縁取られた静かな道や常緑樹の生垣がたらなる江戸の自然景觀は、世界のどの都市も及ばないだろうというのだ。

産業革命かつくりたしたロッキス都市の不快な環境は、たとえばエンゲルスの『イギリスにおける労働階級の状

態

態』(二八四五)に詳細に報告されているが、市街地の息をつまらせるような人口の密集、煤煙の汚染、下水溝の悪臭に辟易していた中産階級は、郊外生活のロマンチックな夢想をしいにふくらませて行く。清浄な空気と緑の田園風景が約束してくれる快適な隠棲である。ロンドンでは一八二〇年ごろから、北郊はハムステッド、西郊はバーンズというように、あたらしい郊外地域が開発された。都市周辺の鉄道網の整備も郊外の拡大をうながす原動力であった。十九世紀の半ばごろまでには、産業都市の劣悪な生活環境を反転させた陰画として、郊外の幻想は都市生活者のスノビズムを育てる有力な源泉のひとつとなったのだ。幕末の日本を訪れたヨーロッパ人は、おそらくこうした不快な市街地と快適な郊外という分裂した都市像を枠組として、極東の大都市を観察したのである(フォーチュンは、モックグに強靱な抵抗力を発揮する日本産のアオキに注目している)。しかも、十九世紀の江戸は、ロンドンにつぐ世界第二の巨大都市であるにもかかわらず、ヨーロッパの産業都市に見るような煤煙の汚染をまぬがれていた。

しかし、イギリス労働者の窮乏を克明に記録したエンゲルスや、救貧法の無慈悲さを告発したディッケンズが、幕末の江戸を観察する機会をもったならば、ロンドンやマンチェスターのスラム街とたいしてかわらない超過密の裏町風景を見のがさなかったにちがいない。それは大英帝国の外交官や東洋の植物の探究に心をうばわれていた園芸学者の観察からは脱落してしまつた部分なのである。

幕末における江戸の人口は、約百三十万人と推算されている。その内訳は武家地六十五万、寺社地五万、町人地六十万であつて、江戸市域の六八・六%が武家地、一五・六%が寺社地、一五・八%が町人地という配分から割りだされる一平方キロ当りの人口密度は、町人地約六万七千人、寺社地五千七百人、武家地一万七千人ということになる(内藤昌『江戸と江戸城』)。現在、東京都でもっとも人口密度が高いといわれる台東区の二倍強に達する町人地の超過密は、その約七割が店借層によつて占められていたという事実(松本四郎「幕末・維新时期における都市の構造」「三井文庫論叢」第四号)と無関係ではない。しかもその大半は、九尺二間の裏店住いを余儀なくされていた下層町人なのだ。西山松之助編『江戸町人の研究』第一巻に紹介されている根津門前町往還ぞいの一劃の絵図(竹内誠「寛政一化政